

2026-1-22 人口減少対策に関する意見聴取プロジェクトチーム（第1回）

9時28分～10時16分

○岡本審議官 それでは、定刻前ではありますけれども、皆様、おそろいになりましたので始めさせていただきたいと思います。ただいまから、第1回「人口減少対策に関する意見聴取プロジェクトチーム」を開催いたします。

内閣官房の岡本でございます。この会議の進行を務めさせていただきます。よろしくお願ひいたします。

初めに、城内大臣から御挨拶をお願いいたします。

○城内大臣 おはようございます。今日は、皆様、大変お忙しい中、人口減少対策に関する意見聴取プロジェクトチームに参加いただきまして、誠にありがとうございます。

それでは、着座にて失礼いたします。

高市内閣では、昨年11月に高市総理を本部長といたします人口戦略本部を設置したところでございます。この本部では、人口減少は我が国が直面する最大の問題であるといった認識に立ちまして、若者や女性を含む誰もが自ら選んだ地域に住み続けられる社会、この実現を目指して人口減少対策を総合的に推進しております。

人口減少対策は、少子化対策や安心して働き、暮らせる地方の生活環境の創生など、幅広い分野にわたるものであります。私としましては、こうした取組を横断的に俯瞰いたしまして横串を刺して総括を行ってまいる考えであります。

先週16日の金曜日には、本日お越しの平井鳥取知事も御参加されました「日本創生に向けた人口戦略フォーラムinこうち」に出席いたしまして、四国地方の知事の皆様をはじめとする関係者の方々と意見交換をさせていただきました。その中で、女性や若者の方々を含む各界の御意見を広くお聴きすることの重要性を改めて強く認識した次第であります。

こうしたことから、このたび、私の隣に座っている金子大臣政務官の下にプロジェクトチームを開催し、幅広く御意見を伺っていくことといたしました。政府における今後の検討に役立てたいと思っておりますので、皆様方におかれましては、本日は忌憚のない御意見を賜れば幸いです。

以上です。

○岡本審議官 ありがとうございました。

続きまして、金子政務官から御挨拶をお願いいたします。

○金子内閣府大臣政務官 本日は、皆様、お忙しい中、人口減少対策に関する意見聴取プロジェクトチームにお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。内閣府大臣政務官の金子容三でございます。着座にて御挨拶させていただきます。

先ほど城内大臣の御挨拶にもありましたとおり、人口減少対策に関わる取組に横串を刺して総括する観点から、各界の皆様の御意見を広くお聴きし、その御意見を整理することなどを目的として本プロジェクトチームを開催することといたしました。

資料1にございますとおり、本プロジェクトチームでは、概ね年度内を目途として、①各分野を包括した基本理念、あるいは目指すべき社会像、②戦略的な目標の設定、③将来的な戦略シナリオ、④総合的な政策体系や推進方策、といった事項を中心に、各界から御意見をお聴きしたいと考えております。

本日御出席の皆様、平井知事は知事や全国知事会人口戦略対策本部長としての御経験、また、小林社長は若者・女性当事者であり、地域資源を生かした事業推進等の御経験、そして、古屋主任研究員は労働供給の未来予測等に関する研究活動といった様々な御知見をお持ちの方でございます。本日は限られた時間でございますけれども、ぜひとも忌憚のない御意見を賜りまして、意見交換をさせていただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。ありがとうございました。

○岡本審議官　ありがとうございました。

カメラの撮影はここまでとさせていただきます。退室のほうをお願いいたします。

(カメラ退室)

○岡本審議官　それでは、早速ではございますが、議事、人口減少対策に関する意見聴取に移らせていただきます。

本日は、3名の有識者の方々にお越しいただいております。資料1に記載の主なヒアリング事項を中心に順番に御発言をいただきまして、その後、質疑応答・意見交換を行いたいと存じます。

まずは鳥取県知事、そして、全国知事会人口戦略本部長を務めていらっしゃいます平井知事のほうからお願ひをいたします。

○平井氏　本日は、こうして城内大臣、また、金子政務官、さらには事務局のほうで、山崎総括事務局長や岡本審議官をはじめ、多くの皆様にお時間をいただきまして、本当にありがとうございました。

冒頭、お話をございましたけれども、城内大臣におかれましては、このたび16日にわざわざ高知まで日帰りでやってきていただきまして、若い方々や女性の意見も含めまして大変真摯に対応していただき、コメントも寄せていただきました。大いにみんな勇気づけられたことだと思いますし、こういうことを一生懸命やっていかないと、一つ一つ直っていかないのがこの人口問題でございます。どうかよろしく今後とも御指導いただければと思います。

また、金子政務官におかれましては、プロジェクトを始められるということではありますが、我々地方団体は、ぜひ車の両輪としてやっていきたいという気持ちでいっぱいござりますので、実情を聞いていただき、うまくいくこと、いかないこと、いろいろござります。そういうものをお互いに考えながら効率的に進めていかなければと考えますので、どうかよろしくお願ひを申し上げたいと思います。

本日は、小林さんや古屋さんと一緒にお話をさせていただきたいと思いますので、意のあるところをくんでいただければと思います。

それでは、着座させていただきたいと思います。

家なるも外なる音も元日は皆なつかしと思ひぬるかな、これは与謝野晶子の言葉でございます。与謝野晶子が、正月、にぎやかにいろいろな家族が集まつてくる、近所の人たちもいる、そういう中で懐かしいなと元日に思うという、これが日本の姿なのだと思います。ところが、そうしたものが今消えつつある。みんな孤立してしまって、どういうわけか都会のほうへ吸い寄せられるように行ってしまう。そして、地域の中ではお年寄りばかりで、これからどうやって暮らしていくらいいのだろうか、こんな衰退が今見えているわけです。こういうようなことを何とかしなければいけないというのが地方団体としてずっと考えてきたことでありまして、お手元のほうに今日は全国知事会の考え方を中心にお示しをさせていただいております。

実は一昨年の8月2日、これは福井県で集まったときに全国知事会でまとめた緊急提言でございます。ここに我々の危機感があります。人口減少という強力な波に飲まれつつある、これは中国だとか韓国だとか、東アジア共通の問題だと、その奈落へと落ちていくのか、あるいはそこから脱却していくのか、今我々は分岐点にあるのだと、こういうことの下に、その下にありますが①②③と書いてあります。

一つは社会減の問題、これを解決していかなくてはいけない。それから、自然減の問題、これはお年寄りが亡くなるのは人生としてしようがないことであります。ただ、生まれるほう、パートナーと出会い、結婚、妊娠、出産、子育て、こういうところはきちんとできるはずだと、こうした自然減の問題への対処、もう一つが③とありますが、人口減少社会は受け入れざるを得ない、得ないけれども、交通だとか、医療だとか、買い物だとか、そういう社会的機能はどこでも享受できますという最低限の暮らし、温かな地域社会というのを残していくかなくてはいけない。この3点が主眼ではないかと考えております。

民間のほうでされました人口戦略会議というのがございまして、そこでいう定常化戦略が①と②に当たるもの、③に当たるものが強靭化戦略と言われていたものであります。多分思いは一致したのだと思います。皆さんのが議論して、労使合わせていろいろな考え方を寄せ合ったのと、我々が経験して帰納的に考えてきたものが一致していると思います。ですから、ぜひ城内大臣、金子政務官におかれでは、この定常化戦略と言われるものだとか、あるいは強靭化戦略と言われるもの、この3つの柱をぜひ考えていただきたいというのが、私たちの経験値であります。

そして、その下のほうに7月24日全国知事会、これは青森で開かれた大会における宣言でございます。ここにありますように、人口減少問題は最大の課題だと我々考えていて、国・地方一体となって国民的運動をやっていくべきだと、今スタートを切るべきだと主張させていただきました。

今ちょうど、城内大臣、金子先生は大変お忙しい中だと思いますが、我々はどういうような政権の枠組みになろうが、これはきちんとやっていくものだとして、ぜひこの高市内閣の中で後世に残るレジェンドとして確立いただきたい、どのようなことが来ても崩れな

い仕組みを政府の中につくっていただきたいと思うわけであります。

裏面のほうに行っていただきますと、これが12月2日、高市内閣が発足した直後に、我々が緊急で申し入れたものであります。冒頭にございますけれども、人口戦略本部が内閣に設置され、城内大臣がその統括に当たられるということになったことを我々知事会は本当に評価しています。これ待っていたということであります。ですから、その内閣の挑戦に我々地方も一緒になってやっていくという決意でございます。

その下にポイントとして、若い方、女性、このキーワードの中で、そして、司令塔、どんなことがあっても崩れない強固な塔をつくって、それで、時代の荒波に逆らいながら、これからもやっていける体制をつくっていただきたいと思います。これが今、日本の中で我々やるべきことではないかということです。

そして、2番目のほうにあります少子化の原因、政策の効果、客観的なデータに基づいて分析をすること、それから、政府の統括の中で社会減・自然減の解決に専門家・実務家を交えて検証してやっていく、こういう体制をつくっていただきたいと書いてあります。例えば具体的に言えば出生率という言葉があります。この扱いが非常にいいように解釈されがちなところがありまして、合計特殊出生率の計算は客観的だとみんな思っています。我々もそれについて目標としてやってきました。

実際に、例えば不妊治療対策とかをやると、出生率は下げ止まります。鳥取県も今1.43という出生率でございます。10年前は0.2ほど高かった。今、全国は1.15であります。10年ほど前、0.3ほど高かった。だから、下げ止まっています。これは多分、こうした不妊治療対策だとか、保育料の無償化だとか、いろいろやってきました。そういうことのあらわれで、究極は若い世代が安心できたかどうかということだと思うのです。

他方で今、0.96なのが東京都であります。しかし、この数字を認めないと言っている人たちもいる。これでは話にならないです。同じ土俵で同じ数字を見て、それで、これは大変だからやりましょうというのに、別に大都市も地方も協力しながらやっていけばいいわけです。その視座がおかしくなってしまっているのがどうかなと。

また、希望出生率をこれから政府が掲げるべきなのだろうと思います。長いこと、これは変えていません。1.8というのが頭に残っています。しかし、鳥取県で当時調べたのは県内で1.95だったのです。現在では2.07まで上がっています。実は若い世代はそれを望んでいるのです。ぜひ調べ直していただいたらいいと思います。安心感さえあれば、もっとお子さんをもうけたいというような希望出生率上がる可能性があって、そういうものを目標にしてやっていくべきだし、それに基づいた政策を組まなくてはいけない、ここのところがずっと長いこと検証されていないわけあります。

また、人材も偏在しています。鳥取辺りだと、人口のうちの勤労人口というのは3分の1ぐらいでございます。東京で単純に人口と勤労者を比べてみれば6割ぐらいであります。それは神奈川とか埼玉とかからも入ってきますので本当はもっと多いです。それだけの人が一つの地域の勤労を支えている、生産を支えている、だから、大分格差があるということ

とのことです。

そこに育成労という外国人の問題が出てくる。我々知事会は多文化共生を推進すべきだという立場でありまして、今、ネットで言わわれていることは正直逆であります。そんなことを言つていられる場合ではないというのは地方の実情なのです。外国人ですが、例えば浜松とかも含めて、東京とか大阪に取られてしまうかもしれない。そういうことも含めた働く人の数をどのようにカウントしていくのかというのは、恐らくこれからの構造的な問題になってくるのではないかと考えるわけであります。

そんな意味で、大変大きな課題がありますが、私たちは人口戦略については本部が政府にできたことを心の拠り所としております。ぜひ城内大臣には、これから我々をリードしていただければと思います。よろしくお願ひ申し上げます。

○岡本審議官 ありがとうございました。

次に、株式会社陽と人の小林代表取締役社長、御発言のほうをお願いいたします。

○小林氏 株式会社陽と人の小林と申します。よろしくお願ひします。

私はふだん福島県で農業の課題の解決と、全国の女性の課題の解決を行っておりまして、その中で、若者・女性の多くの声を聞いてまいりましたので、御説明をさせていただきたいと思います。こちらのペーパーに沿ってお話をさせていただきます。

ごく一部ではございますが、これまで聞かれた声を3点御紹介させてください。

1点目が、東京一極集中のお話がございます。我々が多く聞いてきた声として、東京が女性たちの心理的な避難所になっているというような言葉でございました。つまり、親だったり、親族だったり、周囲だったり、結婚はまだかとか、子供はまだかとかいうプレッシャーが相当かかっている。それから逃げるように東京に来て、東京で働くということは、とある方の言葉を借りると社会的免罪符になっているのですと言われました。

実際に私は東京出身なのですが、東京出身の私の周りの女性たちは、逆に同じ理由で海外に出ております。つまり、ここの心理的避難所として東京が機能しているのではないかというような仮説を1個持つてもいいのではないかと考えております。

2点目、親世代の影響を多く受けますので、母親が自己犠牲をして家のこともやって、何なら聞かれた言葉で「えっ」と思ったのが、夫の靴下まで履かせてと、そんな家事だったり、育児だったり、家計を支えるために働いて、とにかく自分にゆとりがない、時間がないという姿を見てきて、私にはそれはできませんという方々がとても多いのが印象的です。

また、今両立している、私も含めてですが、パワーのあるロールモデルのように映ってしまっていて、とてもロールモデルにはなり得ないというような声も多くいただいております。

3点目は、私自身はその感覚はなかったので、はっとさせられたこと、そして、声がとても大きかったことなのですが、こんな社会に産んでいいのか悩んでいますという声でした。今、この社会に産んでしまって無責任になるのではないかということを非常に懸念す

る女性が多いことが、私は非常に印象的というか、本質的というか、悲しいことだなど感じました。つまり、子育てとか、その分野だけではなく、社会全体に対して不安を抱えているというような現状のあらわれだと思っております。

よくアンケートで地方に戻らない理由として、東京よりもキャリアの選択肢が少ないというところが多く挙げられていると思いますが、実際に話していく中で、地元で東京よりも給料が上がって、東京よりもリモートワークなど働きやすくなっている、いろいろなキャリアの選択肢が、もし、あなたの地元にあったら戻りますかというような質問をすると、うーんと考えて戻りませんと言う女性が実は多いということを、ぜひ御認識いただけたら嬉しいです。

というのも、今申し上げた大きく分けて3点の理由で給料が上がったところで、働くキャリアの選択肢が広がったところで、最終的には心理的に東京が避難所になっている以上、戻るということが決められないという現状が背景にはあるのではないかと考えております。つまり、地方移住だったり、少子化が改善しないという根本的な要因としては、単なる経済的条件だけではなく、この昭和型のジェンダーロール、社会規範というものが大きく影響しているのではないかと考えております。

2ページ目、私からの意見を端的に3点申し上げたいと思います。

1点目が、社会規範をアップデートするのみならず、社会規範のアップデートの速度を上げていただきたいと思っております。現状、令和の仕事、つまり重い物を持つとか、女性の身体的な性差、それがほとんど関係ない仕事が増えてきている。そして、職場に出勤しなくても働けるやり方もいっぱい出てきている。仮にこれを令和型の仕事というと、この令和型の仕事のやり方と昭和型の先ほど申し上げたような社会規範、これが物すごく衝突をしていて、このギャップに女性たちが非常に苦しんでいて、そのギャップの結果、先ほどのリアルな声が上がっているのではないかと考えております。

つまり、この社会規範のアップデートの速度をいかに速められるか、これはもちろん各省庁に頑張っていただきたいのですが、政府一体となって、分野が関わらないので横串を刺して御検討いただきたいことでもあり、また、政府のみではスピードを加速することができないので、民間とどのように連携してやっていくかということを我々も真剣に考えたいと思っております。

2点目は、とはいえるが、地方においては、まだ令和型の仕事ではなく、昭和型、平成型の仕事というやり方が多く残っているのが現状だと思います。そのため、社会規範をアップデートする速度を上げるためにも、この仕事、つまり生産体制の部分を地方がいかに改革できるかというところが、もう1個の肝になるのではないかと思っております。

最後になりますが、我々若い世代の女性にとって、社会規範というものは当然誰しも心の中で内面化していくものだと認識しております。私自身も、夫との家の時間の分担を測ったら、夫は6、私が4でございました。だけれども、夫が6なのだと社会で言うことで、いかにバッシングを浴びるか、正直、もっと女性がやらなくてはとか、お母さんと

の時間が少なくなつてかわいそうとか、私自身は気にしなくても、どこかで気にしているわけです。こうやってどんどん内面化されていって、この社会規範を自分でアップデートしていいものなのかどうかというような悩みがどんどん生じてまいります。

なので、若者や女性に対しても社会規範をアップデートしていいものなのだというようなことが伝わるような対話をしっかりとしていくこと、そして、何らかの体験を通して、頭での理解だけではなく、こういう子育てのやり方もありなのかもしれない。そのような実感を持ってもらえるような政策を御検討いただけると嬉しいです。

以上です。

○岡本審議官　ありがとうございました。

最後に、リクルートワークス研究所の古屋主任研究員のほうからお願ひをいたします。

○古屋氏　古屋と申します。よろしくお願ひいたします。

小林さんのお話を伺つていて、私も子供が2人おります。岐阜出身ではございますが、今、東京で2人子育てをしております。確かに小学校のPTAとかに参加すると、僕以外は全員女性、でも、PTA会長は男性、何かを非常に感じさせると思わせられることがございます。

あと、毎回申し上げているのですが、今日は9時半開催ということで、私は保育園に送つてからここに来ておりますので、大変ありがたい時間から開始いただいたこと、まず、御礼を事務局の皆様に申し上げたいと思います。

私は資料4ということで、横紙なつていろいろありますが、要点だけ申し伝えさせていただきたいと思っております。

私がお伝えしたいのは、人口減少という、まさに平井知事もおっしゃったような東アジア共通、ないしは先進諸国共通の課題かもしれないということの先頭ランナーに日本が立っている。だからこそ、誰も知らない、世界の誰も分からぬ人口減少で引き起こる奇妙なことが日本発で起こっているということを研究している人間として、私はその奇妙なことを起こす日本にとってのある種のピンチと、そして、それが引き起こすその裏表のチャンスということについて、お伝えさせていただきたいと思っております。

1ページ目に、その奇妙なことの代表例、なぜか人口が減っているのに人手不足となっている、奇妙な人手不足なのです。何が奇妙かというと、景気のよさと人手不足がリンクしないということでございます。普通はリンクするはずですが一致していない、ギャップがある。

2ページ目、それはなぜかと言うと、御推察のとおり、人口減少、特に高齢化、高齢人口増というのがエッセンシャルワーク需要というのが労働需要を押し上げている。それが奇妙な人手不足を生んでいることが分かってきている。そう考えると、この人口減少が人手不足もたらしているということは、今後、さらに75歳以上、80歳以上、85歳以上の方々は増えてまいりますので、今起こっている働き手不足というのは、実は今がピークでないという可能性が高いということを3ページ目のような推計で行っています。人口減少、超高齢化による働き手不足というのはこれからが本番である。

そう考えたときに、4ページ目、日本社会に起こっていることは人手不足ではないということです。つまり、従来型の人手不足は景気がいいときに、景気がいいから起きてきた。しかし、今起こっている日本の人手不足というのはそれでは理解ができない。景気や企業業績に左右されず、日本社会で必要な労働需要を日本社会が生み出せなくなってきた。地域社会で必要な労働需要を地域社会が生み出せなくなっていることに起因するかなり構造的な人手不足であるということ、これを労働供給制約と呼んでおります。

5ページ目ですが、その労働供給制約、働き手の取り合いの状況、働き手をめぐるゼロサムゲームという状況のしわ寄せを一番受けているのはエッセンシャルワークでございます。全体の有効求人倍率が1倍ちょっとである一方で、こうしたエッセンシャルワーク関係の各職種・職業においては極めて高い求人倍率で、働き不足の状況に直面している。そのしわ寄せを一番受けている。

この状態が続くと、6ページ目、エッセンシャルワークの会社が大変とか、エッセンシャルワークで働くと大変では全く収まらない、この社会で生きる全ての人に影響がある、生活に手一杯となり、仕事どころではなくなるという状態が顕在化してしまう。

こうした結果として、私も各地を回っていると、本当に奇妙なことが起こっています。最近伺った話では、例えば少子化が進んでいるのだけれども、保育士がそれよりも足りないというお話、こういったことを伺うことがあります。これは、いろいろな人が働かざるを得ない。御高齢の方も今たくさん働いていらっしゃる。そして、女性も働いていらっしゃるから、お家に大人がいないので0歳から預けざるを得ないということが、ある種の保育士さんのなり手不足ということにもつながっているのかなと感じます。

次のページ、人口減少で起こっている奇妙なことということで、あまり注目されていないですが私が重要だと思っているのは、世帯数が増えているということです。日本は2008年頃をピークに人口が減っていますが、それ以降も世帯数はずっと増え続けていて過去最高を更新し続けている。世帯数が何で増えているのかというと、この理由は次の8ページ目に載っていますが、高齢化が進んでいるからです。高齢者は大体半分が一人暮らしだということが、この半世紀ぐらい続いている。今後も続いていく可能性が高い。高齢化というのは実は1世帯に住む人の数を減らしていく、結果として人口減少だけれども、世帯数が増えるということが今後継続していくということです。

いきなり世帯数の話をし始めたなと思われるかもしれません、9ページ目、世帯数の話は極めて重要で、なぜかと言うと、世帯数が増える、1世帯に住む人の数が減ると、エッセンシャルワーク需要を押し上げることが分かってきているからなのです。これは物流の話をすると分かりやすいのですけれども、4人が1世帯に住んでいるケースと、一人一人が4世帯に分かれて住んでいるケース、どっちのほうがドライバーさんの仕事は大変ですかということなのです。当然後者、1世帯に1人住んでいる方が4世帯に別れて住んでいらっしゃったほうが、荷物の数は同じかもしれません、間に3回移動が挟まりますので、その分、ドライバーさんの労働生産性が下がる。ひいては給料につながりづらくなる

ということが今起こっている。これは医療介護ですか、様々なエッセンシャルワーク領域共通の課題、訪問看護とか、訪問介護ですか、そういう状況になっています。

そういったメカニズム、10ページ目、人口減少や超高齢化に伴って労働生産性が押し下げられる。つまり、同じ量の需要を満たすために、より多くの働き手が必要になるという状況が日本で顕在化している。ですから、よくGDPで1人当たりGDP、もしくは時間当たりGDPを比較して、日本がすごく低い、下がっていると言われますけれども、そもそも日本は社会構造的に高齢化の中で、すごく不利な戦い、そういう構造的に不利な戦いを強いられている中で、私はその中でも非常に頑張って健闘しているという状況にあると認識しております。

11ページ目、そういった中で、今ここまで申し上げてきたような人口動態や世帯構造、そして、産業構造というのは、もちろん人口減少という日本共通の課題ではありますが、地域間の差がすごくあるということ、労働供給制約が顕在化する程度、領域、タイミングは地域によって大きく異なる。単純な横展開が通用しない中で、最前線で前例なき試行錯誤を続けるという、それは地域・地方なわけですから、地域・地方の孤軍奮闘にしないために求められるのは、試せる条件を整えて、地域間の相互刺激を促して、そして、失敗のコストを引き下げるという横断的機能だと考えております。

必要な人材の共有化や先進地の成功事例だけではなくて、失敗、挑戦、何が正解か分かりませんから、副作用、コスト、こういったことを含めた集約や総括といった機能が、まさに求められていると考えます。

12ページ目、人口減少による働き手の問題は先手を打つことが可能な分野だと考えます。労働需要のうち、特にエッセンシャルワーク需要、エッセンシャルサービス需要は、人口動態の影響を強く受けるので、人口動態に基づく推計により、将来の必要量をある程度正確に予測することができます。今後の社会を持続可能にして、かつ戦略的に人材を配置していくということ、この地域にどんな仕事が足りないか、どんな仕事が必要かということは、ひいてはどんな仕事が求められるのか、どんな仕事で働けばこの地域で幸せになれるのか、この地域で年収を上げていけるのかということにつながります。この情報がないために、我々がそれを提供しなくてはいけない。これを若者に提供していくことが、軽々に東京が格好いいから行ってしまうみたいな行動を変えるのではないかと考えております。現在、資料の通り、例えば富山県庁さんと富山県立大学、そして古屋の協働で地域の労働需給ギャップの推計を行っております。

最後に13ページ目、人口減少は3つの制約をもたらしていると私は感じます。人口減少は大きな問題ですが3つの別の問題なのかなと、1つ目は総需要減、2つ目は財政制約、そして、労働供給制約ということです。これは地域や領域によってどの制約に最初に直面するかは異なりますので、直面する制約によって打ち手を変える。

例を挙げていますが、特に労働供給制約によるピンチというものは様々なチャンスを産んでいる。例えば賃金を上げざるを得ないとか、はたまた人がいないからDX、AI、IoT、ロ

ボット、こういったものに投資せざるを得ない。こういった問題意識・危機感を地域の経営者の方々にも生んでいます。こういったことを私は人口減少下における日本の、もしかすると、最初で最後のチャンスになるかもしれませんと、このチャンスをものにするために地方を独りぼっちにしないということが求められると考えております。

以上でございます。

○岡本審議官 ありがとうございました。

ただいまの3名の方々の御発言を踏まえまして、質疑応答・意見交換を行いたいと存じます。この会議は10時10分頃までを予定しておりますけれども、その中で限られた時間でありますのがお願いしたいと思います。

まず、城内大臣のほうから御発言はございますでしょうか。

○城内大臣 まず、平井知事に質問です。人口戦略の司令塔ということで、私は、人口減少対策の総括、また、横串を刺すという役割でありますけれども、都道府県を含む地方自治体の役割と国の役割、これをどのように分担していくことが望ましいのか。このテーマで私も先般高知に行きましたけれども、コミュニケーションというか、そういうものが大事だと思いますし、国の担当者と地方の担当者、今はリモートでもいろいろなことができますので、できる限り頻繁にコミュニケーションを取ることが大事だと思いますが、こういったことについて御意見をいただきたいと思います。

○平井氏 城内大臣におかれましては、先般も高知に来ていただきまして、本当に久しく皆さんとお話をさせていただきました。あれで勇気づけられる人たちがたくさん出ると思うのです。そうやって国民運動を起こしていく、ぜひ城内大臣が主導してやっていただければと思います。

この問題は、今いろいろとお二人のお話にもありましたが行政だけで解決できません。例えば職場の中が変わらなければ働き方は変わらないという、そこに令和的なビジネスモデルというのはもっと出てくるはずです。家庭の中も変えなくてはいけない。そういうところは、もしかすると、子育ての問題が絡むかもしれませんし、また、一種のライフスタイルの改革をしなくてはいけないということです。

鳥取県も今、新年度予算で検討しているのはアンコンシャス・バイアス解消運動を全国で初めて立ち上げてやろうではないかと考えているのです。鳥取県だけでやっても多分駄目なのです。全国、東京に行ってもどこに行っても同じように働き方を変えて、どこに行っても女性も安心できます、子育てもできますということをこの国としてやっていかなくてはいけないわけです。いろいろな規制がかかっていて、各省庁、それぞれ事情があってやっているのですけれども、制約がすごく邪魔になっていることもあります。

これから心配なのは外国人労働者の動きです。特に浜松とかはあると思いますし、我々は長崎と農家の農業労働力を共有しているのです。長崎と鳥取は農繁期が違うのです。外国から来た人に両方を行き来してもらうことを始めているのですけれども、いろいろとやっていかないと、この問題は解決しません。

そういう意味で、我々地方でもやることをやり、意識の共有をぜひ図っていただきたいと思いますが、国が我々の現場の様子を見て、国の行政のやり方を変えていただきたい。ぜひその潤滑油を果たしていただきたいというのがあります。

あと時節柄、どんなことがあってもぶれない城内大臣でいていただきたいと思います。そういう意味で、いろいろな雑音だとか、見方の違う人はいるのですけれども、これは学者の目で見て、専門的に見て、このように分析されますということを言い切っていただく。そういう存在が国として必要でありまして、地方団体間で幾ら話し合っても結論がまとまらないこともありますので、よろしくお願ひ申し上げたいと思います。

○岡本審議官　ありがとうございました。

そうしましたら、金子政務官のほうから御質問いただければと思います。

○金子内閣府大臣政務官　小林さんにお聞きしたいのですけれども、社会規範のアップデートは非常に重要だと思います。一方で、お年寄りの方から現役の方、それから、アルファ世代と言われるようなさらに若い方というところで、いろいろな世代が今、この日本にはいるわけでございまして、この世代にまたがって、その世代全員の方々に社会基盤のアップデートの重要性を醸成していくためには、何が重要なのかというところをお聞かせいただければと思います。

○小林氏　ありがとうございます。2点申し上げたいと思います。

1点目が、今、社会規範が日本は変わるのが遅いと歴史的に言われておりますが、その大きな要因として、例えばジェンダーでいうと、実績を上げるようなプロジェクトにアサインされ、さらにその実績を上げるということが圧倒的に諸外国より少ないと言われております。つまり、実績がないので影響力が拡大しませんのでスピードが遅くなっているという指摘がございます。政府・自治体におかれでは、もちろん3割のルールを科学的根拠に基づいて置かれていると思いますが、意思として、例えば若者と女性を4割入れるなど、しっかりとメッセージのある数字を出していただけたら嬉しいと思っております。

2点目が、言葉の問題というものがあると私は思っておりますが、もともと私は役人をやっておりましたが、その言語が福島の現場においてなかなか伝わらない。要は役人用語が現場で非常に多いということがあるのではないかと思っています。社会規範である以上、全国民が分かりやすい言葉をどうつくっていくか。少なくともアンコンシャス・バイアスという話をして、分かる、伝わる方は、私がやっている感覚だと、ほぼないです。アンコまでは覚えられると言われてしまう現状なので、それが何なのかという言葉をしっかりと国で統一して御検討いただけたら嬉しいです。

以上です。

○岡本審議官　ありがとうございました。

そうしたら、もう一周りぐらいできればと思います。

城内大臣のほうからお願ひします。

○城内大臣　それでは、古屋さんにお尋ねなのですが、労働供給制約、エッセンシャルワ

ーカーが今、非常に人手不足ということあります。体を使って、かつ医療や介護、生活衛生というところは、非常に人の命に関わったり、衛生面でしっかりと大変なことになったりするということで、肉体を酷使するとか、あるいは安心安全に関わるということであって、僕自身、これは非常に重要な職業であるにもかかわらず、ワンランク下みたいな、サービス業だって気配り、気遣いとかとがあるではないですか。

エッセンシャルワーカーに対する評価を上げて、他の業種で働いていた人が、こういったエッセンシャルワーカーを基本とする業種に賃金を上げて入ってくるようにすることが大事であって、外国人の活用ももちろん大事ですけれども、まずはそうした認識を変えていく必要があるのではないかということあります。

もう1点、小林さんのお話について、私は外務省出身ですし、海外もいろいろなところに行っていまして、10年ぐらい海外生活をしておりますが、私も全く同じ感覚だと思っています。私の選挙区は浜松で、大変広い12市町を合併した都市部と中山間地域のある縮図型のところです。私はずっと東京は外国だと思っていまして、特殊な国際都市であって、東京のスタンダードが地方に適用されるのは非常に難しいというか、非常に特殊な、日本語をしゃべっている国際都市みたいな感じであります。おっしゃるように社会規範に対する認識を地方でも改めるのは非常に重要だと思うのです。

ただ、なかなか難しいのは、社会規範は上から目線で意識を変えることは、時間がかかりたり、コミュニケーションが大事であったり、または世代間格差、人口集中地域と中山間地でまた違います。これは質問というよりも目からうろこの御指摘があったので、参考にさせていただきたいと思いました。

○古屋氏 城内大臣、ありがとうございます。

全く同感といいますか、まず、賃金の問題が非常に大きい。規範の問題ももちろん大事ですし、加えて賃金をどう上げていくのか、これは実際に分析すると、2020年ぐらいから5年間、実はエッセンシャルワークが上がっているのです。特に上がっているのが大工さん、あとドライバーさん、電線など通信インフラを施工される方々、こういった方々が実は物すごく上がっていらっしゃる。こういった情報がまだ届いていないということ、アメリカではブルーカラービリオネアという言葉があるのですが、日本でも実は起こりつつあることを私みたいな人間がしっかりと発信していくなくてはという責任をすごく感じています。

ただ一方で、重要なのはエッセンシャルワークでも二極化が起こっている。これは御推察のとおりございますが、医療福祉関係は分かりづらいわけです。介護士さん看護師さん、薬剤師さんとか。

○城内大臣 公定価格。

○古屋氏 おっしゃるとおりです。こういったものをしっかりと認識した上で、いかに手を打っていくのかということ、その上で、地元でしっかりと育てていくということです。地元で働きたいという若者が実はかなりいますので、やむにやまれず、小林さんもおっしゃ

いましたけれども、仕事がないから出て行かざるを得ないと。しかし、求められる仕事はあるのだと。その仕事で役立つ教育を受けていないから、普通科高校で何となく大学に行く教育をしているから「仕事がない」のではないかと。戦略的に人材を地元で育てていくことが重要になってくるかと思います。

○小林氏 ありがとうございます。

未来を選択する会議において、社会規範のアップデート速度をいかに速めるメカニズムを解明できるかということを今考えておりますので、また、連携できたら大変嬉しいです。

○岡本審議官 もう1問だけ、政務官のほうからぜひということで、よろしくお願ひしません。

○金子内閣府大臣政務官 知事にお伺いいたします。

出生率のお話を先ほどいただきました。目標の在り方とか、そういったものを検討するに当たりまして、出生率の目標などを立ててしまうと、若い方や、女性の方々からプレッシャーを感じるだとか、そういった御意見も聞いたりするのですけれども、そういった点についてどのようにお考えなのかというのをお聞かせください。

○平井氏 これは我々も言葉遣いを非常に気にするところであります。ただ、一つは、プレコンセプションケアということを考えていくことだと思います。これは女性だけではなくて男性もそうなのですから、一つのライフサイクルというのをどのように考えていくのか、選択肢は当然それぞれ人の人生にある、これを前提としてであります。

それをやりながら、例えば希望出生率というのを前面に立ててやっていったほうが、安倍内閣のときとかも無難なこなし方だったのではないかなと思っております。この辺は多分、この人口問題をやるときにいろいろと議論されると思うのですが、平成12年に、実は人口問題の審議会が廃止されているのです。それ以降、四半世紀にわたりまして、少しほったらかしにされている分野だと思います。

今、政務官がおっしゃるような、国民に与える意識づけや印象も、片方でそうした専門家に気にしてもらなながら、また片方でどういうアプローチ、どういう数字が誘導目標として意味を持つのか、この辺は議論する価値があると思っていまして、新しい高市内閣の中で取り組んでいただけたとあります。

○岡本審議官 ありがとうございました。

お時間が少し過ぎましたけれども、最後に、金子政務官からまとめの御発言をお願いいたします。

○金子内閣府大臣政務官 時間が少しオーバーしてしまいました、大変申し訳ございませんでした。

本日は、貴重な御意見をいただくとともに、有意義な意見交換をさせていただきました。

冒頭も申し上げましたけれども、人口減少対策の総合的な推進に当たりましては、各界の皆様方の御意見を幅広くお聴きすることが不可欠であると考えております。本日の会合

で御指摘いただきました点につきましても、事務局で整理をして今後の検討に役立てていきたいと考えております。

これをもちまして、本日のプロジェクトチームを終了させていただきます。

本日は誠にありがとうございました。